



リトアニアの少年



ユネスコの世界遺産に登録されるビルニュス旧市街



ひらひらとき  
ピアノ。作曲家、73年東京生まれ。劇団高校、劇団飛鳥大文字学芸部部長、東京音楽大学客員教授、コンツェルト・アカデミー理事を務めた。これまでヨーロッパ・中央・アジア各地を異国旅行。第2回「音楽の国」ツアーで、東京・アムステルダム・鹿特丹・ハーグをめぐり、しばしばライヴを行う。2015年、ラ・フォル・ジュルネ、尾道・ルルル祭の、セシリア、中城美、ヨーロパ・放送で演奏。2016年、パリ・カサ・カサ・ロイヤル・コンサート、コンツェルト・アカデミー・コンサート、ル・パリス（ロンドン）、銀座・王子ホール等でライヴ演奏も行う。音楽を通じて平和・国際・交流・教育・情報にも積極的に取り組む。3.11以降、海外各地で音楽家連帯コンサートを行い、これまで1,500人以上を援護関係へ寄付する。07年よりプロジェクト「日本の国境なき音楽」(韓国・音楽・韓城のつなぐプロジェクト)に活動資金を供給。NHK文化センター、朝日新聞ライヴ・アワー等で演奏。NHK、テレビ朝日「世界の国境なき音楽」で世界各地でテレビ・ラジオにも出演。96年よりロンドン在住。

写真提供: 株式会社メディアにて提供の写真は公開中。  
もっと世界の人の笑顔を見てみたいという方は必須です。 www.motoki-hiral.com

## フォトエッセイ「国境なき音楽紀行」

### 第4回 リトアニア ～杉原千敏を讃えて～

日頃、音楽を通して人々と交流し、世界各地を旅することが多い。これら旅の印象と感動を、フォトエッセイという形でみんなの一部でも日本の皆さまにお届けできればと思う。 平井元薫



ビルニュス旧市街にある大鐘楼と大聖堂。1999年、旧ソ連下のバルト3国で独立を求め、650mに達して人が歩むつない「人間の縁」の起点となった



首都ヴィリニウスのワグネル湖と浮かぶドラゴクワイル城。



編者：平井元薫（本人の写真を除く）

バルト三国のリトアニアには、19世紀末まで自然崇拜の多神教とカトリックが混在し、現在も多様な文化と美しい自然に彩られている。しかし一方で、1990年3月11日の独立回復宣言まで、ロシア、スウェーデン、フランス、「ポレトイ」、ポーランド、ナチスドイツ、ソ連など侵略、併合された苦難の歴史をもつ。

「311」はたまたま私の誕生日でもある。日本人だけがくりにトアニアにとっても象徴的な数字である。リトアニアは中国以降、多くのユダヤ人移民を受け入れ、名ユダヤオニスト・ハイフェニウスを生んだ首都ヴィリニウスは20世紀初頭、「北の文化都市」であった。その後、ナチス・ドイツやソ連の時代にも多くが国外へ亡命するを余らしたため、一時30%を超えたリトアニアのユダヤ人の割合は現在、0.1%以下しかない。

私は演奏旅行で2度リトアニアを訪れたことがある。リトアニア独立回復20周年にちなんで2010年6月には、2都市でピアノリサイタルを行った。このうちヴィリニウスでは、

ジョハン・バッハ生誕200周年を記念した「ジョハン・バッハ」主催、ポーランド・インテグリティ・ショパンの作曲を中心に自作「ソナタ」のオマージュなどを演奏した。リトアニアは、18世紀末まで200年以上に渡り、隣国ポーランドとの連合国家「ポーランド・リトアニア共和国」と構成していた時期があり、ポーランドと密着していた。第2次大戦中も多くのポーランド系ユダヤ人がリトアニアを経て海外へ亡命した。リトアニアの臨時外部官、杉原千敏は日独同盟を無視し、日本の通過査証(ビザ)を無断で発給し続け、約

6000人のユダヤ人の命を救ったとされる。ナチス・ドイツ支配下のポーランドで12000人余りのユダヤ人を救った「ドイツ人オスカ・シンドラー」にならみ、日本人シンドラーと呼ばれる。カウナスで行った2回目のリサイタルは、杉原記念開館10周年を記念した「日本リトアニア親善・平和祈念コンサート」(主催:杉原財団、後援:リトアニア日本大使館)であった。会場には、ホロコストユダヤ人大屠殺40年の歌が響いた。私はアンコールで自作の「哀しみのワルツ」を演奏した。おぼろげながら泣いた。幸運にも生き

残った自分たち、そして国外脱出が叶えられなかった親類など。その後の運命を思ったのだという。もし私が杉原千敏と同じ立場であったとして、再びあがけずかたかどうかわからない。それでも、スティーヴン・ヘンダーソンが浮かんで、ありがとうと少しと微笑みながら、少しだけ救われる思いがした。

人種・言語・宗教の壁を超えて、音楽は人の心に直接響く。そして、音楽に国境など存在しない。この信念を胸に私の旅は続く。

現れた自分たち、そして国外脱出が叶えられなかった親類など。その後の運命を思ったのだという。もし私が杉原千敏と同じ立場であったとして、再びあがけずかたかどうかわからない。それでも、スティーヴン・ヘンダーソンが浮かんで、ありがとうと少しと微笑みながら、少しだけ救われる思いがした。

アンコールで自作の「哀しみのワルツ」を演奏した。おぼろげながら泣いた。幸運にも生き残った自分たち、そして国外脱出が叶えられなかった親類など。その後の運命を思ったのだという。



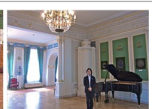
カウナスでのリサイタル終演後、ピアノの前で、アンコールで自作の「哀しみのワルツ」を演奏。6月11日。杉原千敏氏生誕100周年記念コンサート開催時。杉原千敏の肖像画が背景に飾られている。



「杉原ハウス」とも呼ばれるカウナスにある杉原記念音楽団体の事務所。杉原千敏は、このビルで「国境なき音楽」を発見した。杉原千敏の生誕地であった。



「ショパンサロン」で演奏する筆者



ピアノリサイタルの会場「ショパンサロン」(独立直前製)。かつては臨時の演奏会場に用いられていた。現在は、長年ショパンの生誕地としてより